



海部宣夫・国立天文台台長が講演

すばる望遠鏡がとらえた「宇宙の果て」

国立天文台台長の海部宣夫氏

夫氏Ⅱ写真Ⅱの講演が7月

12日、中央大学理工学部で

行われた。氏の専門分野は

電波天文学、赤外線天文学。

ハワイのすばる望遠鏡計画

の責任者などをつとめた。

「宇宙の果てとはなにか」

と題した最先端の講演に、

学生ら多数が詰めかけた。

講演の一部を紹介しよう。

宇宙誕生9億年後の姿

宇宙の果てとはなにか。こ

んな人類の夢を実現するた

めに建設されたのが「すば

る望遠鏡」です。すばる望

遠鏡は、ハワイ島マウナケ

ア山頂にある日本が誇る大

型反射望遠鏡。一台でたく

さんの観測機能を備え、宇

宙の遠くに

ある天体を

見つける機

能と画像の

美しさは世

界でもダン

トツに優れ

ています。

遠くの天体

を見つめる

ための反射

鏡は有効口径8・2メートル

もの大きさ。技術的には

不可能と言われ続けていた

にもかかわらず、7年の歳

月をかけて日本のメーカー

に製作してもらったものです。

すばる望遠鏡が発見した

一番遠い銀河の距離はおよ

そ一二八億光年。その距離

から地球に光が来るまでに

一二八億年かかります。現

在が宇宙の膨張が始まって

からおよそ一三七億年と言

われているので、宇宙の誕

生から約九億年後の姿を見

ていることになりました。

認識の果て 宇宙の膨張

はビッグバンで始まりま

した。では、ビッグバン以

前はどのような状態であっ

たのでしょうか。インフレーション

ン(加速度膨張)であったと予想されていますが、ではその前は?となると、観測することはまだ難しい状況です。そこで私は「宇宙の果て」を「認識の果て」として解釈しています。

我々は新しい知識を内なる宇宙として取り入れてきました。誰かが見たものを自分の知識として。知識を人類全体と共有し、空間と時間を越えて宇宙を広げるのです。科学とは、その宇宙を知ること、認識すること。認識していないものは自らの宇宙には存在していません。ですから、文学も科学も宇宙を広げてくれるのです。

かつて洋学が入ってきたとき、科学技術という言葉が生まれました。この言葉は日本人による造語で科学と技術は別物です。科学は知ること、技術は作ること。

知ることとは人間の本能であり、知識の積み重ねることです。「宇宙の果て」を広げてきました。過去の発見を現在または未来の誰かが受け継ぐことで、人類をひとつにすることができのです。

宇宙の生命 最後に宇宙の生命についてですが、今世紀半ばごろまでに宇宙の生命が見つかると思います。宇宙には太陽以外にも無数の恒星があり、その恒星の周りを回っている惑星もまた数え切れないほどあるということが、はっきりしている。平和な時代が続く限り、可能性はあるでしょう。

海部氏は「星間物質の研究」で日本学士院賞、「ミリ波天文学の開拓」で仁科記念賞を受賞。1997年から国際天文連合副会長。(学生記者 原田成Ⅱ理工学部)